

『007 スカイフォール』に見る英国社会の2012年

島崎仁誠

はじめに

『007 スカイフォール』（以下、『スカイフォール』）は、2012年公開の007シリーズ23作目の作品である。同時に、『007/Dr.No』公開から数えて、007フランチャイズの50周年を記念する、象徴的な作品でもある。そんな『スカイフォール』は、007シリーズ内において重要な位置を占めるだけでなく、英国社会にとっても象徴的な位置を担っていると考えられる。なぜならば、映画が公開された2012年は、ロンドンにおいて夏季オリンピックが催された年でもあり、ここで、ジェームズ・ボンドは英国統合の象徴のアイコンとして、その開会式において、エリザベス二世と共にダニエル・クレイグ扮するジェームズ・ボンドが登場するからである。

『スカイフォール』は、そのテーマとして「新しいものと旧きものの対比」、そして、それらの「世代交代」が象徴的であるが、本論では、「新しいものと旧きものの対比」の中に、三つの類型があることを考察したい。そして、この三つの類型を持つ「新しいものと旧きものの対比」を描くことで、『スカイフォール』が、2012年を迎えた英国社会をどのように象徴しているのか/英国と007にとっての2012年を考察したい。

1 「新しいものと旧きものの対比」とその三つの類型

『スカイフォール』を論じるにあたって、基本的な劇の流れを、あらすじを紹介し、整理したい。何者かによって、英国秘密情報部MI6から各国に潜入しているエージェントの情報が記載されたハードディスクが奪われるところから物語は始まる。主人公ジェームズ・ボンドは、上司Mの命令でディスクの奪還を試みるが、その最中、事故によって戦線から離脱してしまう。束の間の引退生活を経て、任務に復帰する。世代の異なる同僚・Qと出会い、協力しながら、再び犯人を追うボンド。その先には、かつてMのもとでエージェントとして働き、Mによって人生を狂わされた、シルヴァが待ち構えていた。Mへの復讐を遂げるためMに迫るシルヴァと対峙し、ボンドとMは、ボンド、シルヴァそしてMの過去に決着を付けようとボンドの生家・スカイフォールでの最終決戦に臨む。なお、以下のセリフは日本語については映画の字幕より、英語については脚本¹より引用する。

1.1 「旧きもの」の衰えを浮き彫りにする、「旧きものへの退場宣告」

ここでは一つ目の類型として「旧きものへの退場宣告」を、作品の中のセリフやその他の表現から示したい。

一つ目が、マロリーのMへの引退勧告である。ディスクを奪われたMは、その責任を追及される立場に追いやられた。新しく国防情報委員長（Mの上司格）に就任したマロリーは、昔ながらのスパイによる諜報活動を展開するMとMI6に、「いいや 引退プランの提

案だ」「職務を全うしたのだ だから引き際も毅然と」と引退を勧告する。これはまさに、これまで任務を遂行してきた M というベテランに対しての後任ともいえるマロリーによる退場宣告だと考えられる。二つ目は、事故による戦線離脱から、ロンドンに戻り、復帰/再生を果たしたボンドから M への「もう十分です あなたも僕もね」というセリフ。ここでは、事故の当時、ボンドがディスクを持ち逃走した犯人に追いつき格闘していたものの、事情により、ボンドに同行していたイヴに犯人を狙撃するよう M が命じたところ、ボンドに当たってしまい、結果、ボンドは負傷し、ディスクは奪われてしまったこととそれを命じた M を糾弾するシーンである。ボンドは M の判断に疑義を呈するとともに、お互いが長くその座にすぎた、ひいては衰えが職務を全うすることを妨害していることを指摘している点で、退場宣告といえると考えられる。三つ目が、復帰テストを終え、新たな任務を言い渡されたボンドに対してのマロリーの、「なぜ“生き返った”？ あのままだ姿を消していれば静かな暮らしができたのに」「現場は若さの世界 負傷して引退するのは恥ではない 引き際が悪いのは恥だ」というセリフである。一つ目からもわかるように、本作でのマロリーは、絶えず引導を渡す役を担っている（その結果、物語の最後では、死去した M の後任として、新たな M に就任する）。

四つ目が、M の老いを示すと考えられる、次の二つのセリフだ。一つがマロリーによるボンド復帰の是非を M に問うた「あなたはわかっていない 情に流されている」というセリフである。これは、これまでの作品の中で、あるいは劇中に示されたエージェントを束ねる上司という立場から冷静に判断を下すべきである M が、情に流されてしまっていることの指摘、つまり M の老い・衰えを喝破しているセリフであると考えられる。そして、もう一つが、M がボンドを任務に送り出すときに発した「ロンソンの仇も」というセリフである。このセリフは、任務に出発するに際して、ディスクを奪われた際に負傷し、死亡した同僚のロンソンの仇をとりたい、というボンドの気持ちに寄り添った、情のこもったセリフである。この時、再び、M の冷静でない部分が表現され、M の衰えが表されていると考えられる。五つ目が、Q と出会い、武器・道具を受け取った際のボンドのセリフ、「世代交代か」である。これまでのシリーズから逸脱した若い Q が登場し、さらに彼は、もはやエージェントはテクノロジーに劣ると言ったり、かつてのシリーズに象徴的であった「ペン型爆弾」のようなギミックにあふれる道具を時代遅れだと評する。ボンドが、新世代の登場を目の当たり、体感した後のセリフである。六つ目は、再びマロリーから M へのセリフで、「影の組織“は過去のものだ”というものである。ディスクを奪われたことにより、内部情報が明るみになり、世間からエージェントや MI6 といった昔ながらの諜報機関の存在が疑問視される中での、それら「旧きもの」に退場を迫るセリフである。七つ目は、シルヴァの根城で、ボンドとシルヴァが初めて相まみえる中でシルヴァによって語られる次のセリフである。彼は同じ M の下で働いていた存在としてボンドと自身を比べながらも、「力での勝負は退屈だ 飽き飽きだよ」「スパイを追う？ 時代遅れだ」「英国 大英帝国 MI6 気づいていないがここと同じ廃墟/England ...The Empire ... MI-6 ... You're living in a ruin as wellⁱⁱⁱ.」

と言っただけ、スパイなどの栄光は過去のもの、と喝破している。そこには、かつての「日の沈まない大英帝国」はもはやなく、二つの大戦に「勝利」し、西側世界をリードすることを目論んでいたほどの影響力とそれを下支えしていたエージェントたちの居場所が今や無いこと（英国の自信とその根源の喪失）、つまり「旧きもの」の退場が謳われている。八つ目は、ボンドとの対決に破れ、ロンドンで収監されたシルヴァが数年ぶりに対面した M への「こんなに小柄だったか」というセリフである。シルヴァの M に対する記憶の遠さと共に、M の老い・衰えの表現がされていると考えられる。九つ目が、スカイフォールでの対決の最後に、M が逃げ込んだ教会が、ボンドの両親が眠る、ボンドの過去が詰まった教会であることを見出したシルヴァのセリフである。ここでシルヴァは、M もろとも死ぬことで、M への愛憎を昇華させるとともに、古い存在（昔ながらのスパイ）に終止符を打とうとしている（「旧きもの」を退場させようとしている）と考えられる。このときシルヴァは、「いいねここ以外ない/ Of course... it had to be here. It had to be this way. Thank you^{iv}。」という。十点目は、M の死に際し、涙を流すボンドの姿である。フランチャイズの中でダニエル・クレイグによるボンドは人間味あふれるボンドとして描かれてきたが、涙を流すのは初めてであった。ましてや、これまでの 007 としてのイメージからも逸脱するシーンである。このシーンは、（感情に流されてしまう、涙をこらえられない、）ボンドの老いを描いていると考えられる。

1.2 旧きものの価値を再発見する、「旧きものへの鼓舞」

ここでは、二つ目の類型として、「旧きものの価値を再発見する/古い存在への鼓舞」について明らかにしたい。

一つ目が、シルヴァによって MI6 本部が爆破され、古くからの地下壕を使った「チャーチルズ・バンカー」へと移動したシーンである。ここでは、古くからのもの（「旧きもの」）を、懐古すると同時に、原点回帰のような、昔に活路を見出すことが描かれていると考えられる。二つ目が、新世代を象徴する Q から渡された、昔ながらの技術を使った「無線という武器」（セリフより）である。これも、原点回帰、古くてもまだやれる/使い道がある/輝ける場所が残されていることを示すのではないかと考えられる。三つ目が、マカオへ飛んだボンドが、昔ながらの剃刀で髭を剃るシーンである。ここでは、ボンドの「古風なものは捨てがたい」や、イヴの「古いものはいいわね」というセリフが語られる。ここでは、その前のシーンでの、若く、新しいテクノロジーを駆使する Q との対比を引き継いで、剃刀と自分を「旧きもの」として重ね合わせるとともに、そんな「旧きもの」にもまだまだ使い道/価値があるぞ、と表現していると考えられる。

四つ目が、シルヴァから逃げ、ボンドと M が共にスカイフォールへ向かうシーンである。スカイフォールというボンドの生地、つまり過去の凝縮された空間に向かう際に、M : 「どこへ」、ボンド : 「過去へ 有利に戦えます」というセリフが語られることは、過去に活路・価値を見出す表現であるといえると考えられる。また、このとき見落とすことができないの

が、「旧きもの」とされたMI6の2人が、フランチャイズおなじみ・往年のアストンマーティンDB5に乗って、「過去/スカイフォール」へ向かうという点である。五つ目が、スカイフォールにてシルヴァを迎え撃つ準備をするボンドたちの、「昔ながらの武器が一番役に立つ」というセリフである。限られた手持ちの（愛用するワルサーPPKとみられる）拳銃とマガジン、残された父親の猟銃とダイナマイト、その銃たちの中に埋もれていたナイフを眺め、ボンドの育ての親ともいえるキンケイドが語ったセリフである。これは、昔ながらの手に馴染み、使い古した武器こそ信頼でき、効果を発揮するという、時間の積み重ねに対する自信の表れであると考えられる。また、結果的に、最後にシルヴァを倒すのは、ボンドによって投げられたナイフであったことも、このセリフを補完し、「旧きもの」の存在価値を示すシーンであるといえると考えられる。六つ目が、Mの遺言によりボンドへ譲られたブルドッグの置物がイヴにより渡されるシーンである。このブルドッグの置物は、旧MI6本部時代からMのデスクにあるもの（図I～III参照）であり、いわば、旧MI6本部、はたまた「旧きもの」とされたMI6自体の「遺物」といえると考えられる。そして、それをボンドに受け継ぎ、委ねること、あるいは作品中に生き永らえさせることは、そんな「遺物」・「旧きもの」がまだ輝ける余地があること、存在する必要があることを暗示しているのではないかと考えられる。だからこそ、劇の最後において、イヴが置物を手渡す際の「“デスク仕事”をしろって意味？」というセリフに対して、ボンドは、「(置物はデスクワーク・引退の示唆ではなく、) 逆の意味さ」といえるのではないだろうか。また、このブルドッグは背中にユニオン・ジャックを背負っている。このことが何を表現するのかについて考察すると、すなわち、このブルドッグこそが、「旧きもの=ユニオン・ジャック/英国」という等式を成立させていると考えられる。このブルドッグには二つの意味が込められていると考えられる。まず、一つ目が、「旧きもの」である。前述したように「Mから譲り受けた」という点から、「旧きもの」であるといえると考えられる。二つ目の意味として、このブルドッグは英国旗を背負っていることから、すなわち、英国を象徴する存在と言え、「ブルドッグ=英国」ということができる、と考えられる。故に、「旧きもの(=ブルドッグ)=英国」という図式が成り立つと考えられる。



図 I MI6 本部の M のデスク上にあるブルドッグの置物

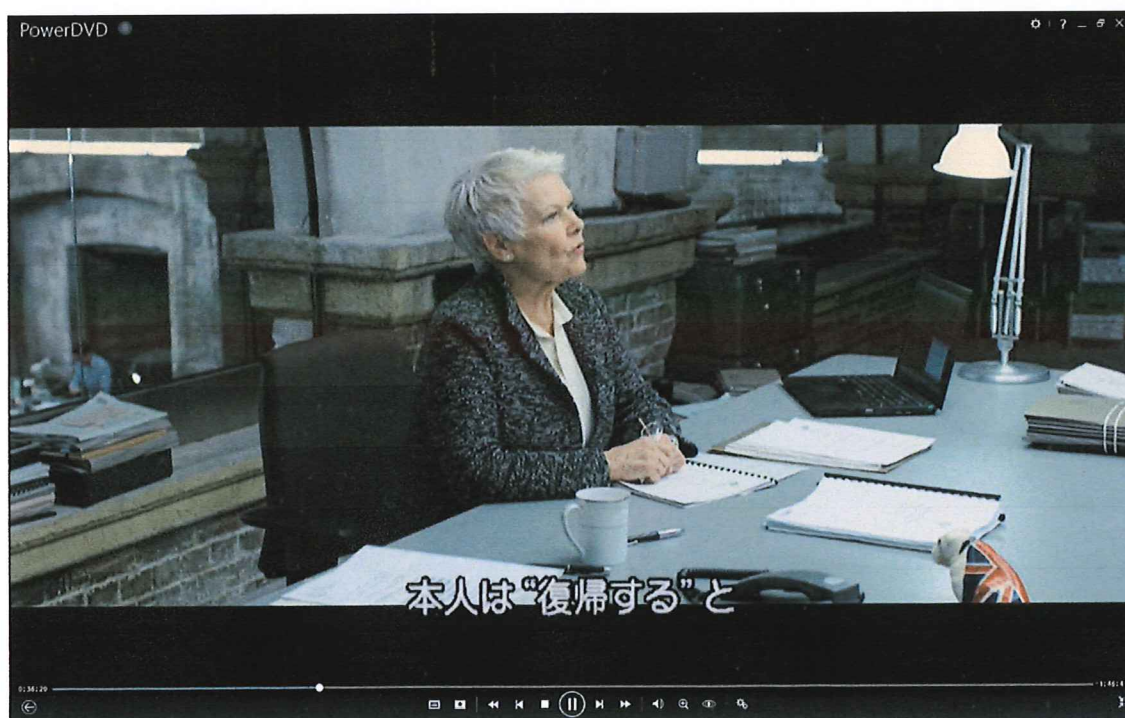


図 II 「チャーチルズ・バンカー」の新 MI6 本部に移されたブルドッグの置物



図Ⅲ M からボンドへと受け継がれるブルドッグの置物

1.3 古くて新しい/新旧の融合・調和

ここでは三つ目の類型として、「古くて新しい/新旧の融合・調和」について述べたい。

一つ目が、ボンドとQが、道具の受け渡しのために対面したシーンである。ここでは、Q：「パジャマ姿でも諜報部に勝てます」、ボンド：「僕は不要?」、Q：「銃を撃つときに必要です」、ボンド：「銃を控える時も」といった会話の後に、ボンドとQが握手を交わしている。この時、Qによる、テクノロジーや新しいものの優位性を説きつつも、「旧きもの」(昔ながらのもの/物理的な力)を認める態度が示されており、新しいものはやはり強力であるが、しかし、「旧きもの」でもまだまだ必要とされ通用するものもある、新旧の融合が必要、ということが示されていると考えられる。二つ目が、シルヴァがMI6から逃走した際に、使われなくなった古い地下鉄の路線図がキーワードとなったシーンである。ここでは、「使われなくなった」「古い地下鉄」の知識が活きる、つまり、「旧きもの」の活躍といえると同時に、それを解析するQのテクノロジーと合わさって共闘しているシーンであるため、新旧の融合するシーンではないかと考えられる。

また、この「新旧の融合」という類型においては、その下位分類とでもいえる形で、「フランチャイズの系譜上にあること/旧作との融合・連続」が分類できると考えられる。これは、数々の旧作から受け継いだモチーフたちの登場によって示される。一つ目が、Qの存在である。もちろん『スカイフォール』単体で考えれば、単なる新世代のメンバーの登場といえる。同時に、Qはこれまでのフランチャイズのなかで、絶えずボンドを強力にサポートしてきた欠かせない役柄でもある。この時、今回の若きQの登場/フランチャイズにおける再

登場は、『スカイフォール』がフランチャイズの系譜の中にあることを示す、明確なサインであるといえると考えられる。二つ目が、アストンマーティン DB5 の登場である。前述したように、ボンドとMをボンドの過去・出生の地スカイフォールへと運ぶ際に登場する。この車は、歴代ボンドカーの中でも象徴的な一台であり、この登場によって、単にフランチャイズの系譜を受け継いでいることが強調されるだけでなく、より王道的な、「ザ・007」とでもいうような意識付けがなされていると考えられる。また、この DB5 には、ライトがマシンガンに変わる往年のギミックも施されており、旧作へのトリビュートが伺える。加えて、この DB5 が作中に初登場する際には、『007 のテーマ』が流れており、「これぞ 007」というイメージを強調する作用があると考えられる。三つ目が、マネーペニーの存在である。作品の最後に、これまでボンドと行動を共にしてきたエージェントであるイヴが、「イヴ・マネーペニー」という名であることが明かされる。このマネーペニーという存在も、Q 同様、フランチャイズを通じてボンドを支えてきたキャラクターであり、フランチャイズの系譜にあることを示す要素であると考えられる。ただし、これまでのマネーペニーは、ボンドに思いを寄せるようなニュアンスが描かれることもあったのに対し、今作でのマネーペニーは、前述の剃刀のシーンでボンドの「手遊び」をいさめるなど、毅然とした「新しいマネーペニー」像が描かれている。この、マネーペニーのリニューアルについては、M が今作でマロリーへと交代したことと併せて、「ダニエル・クレイグ期へのリニューアルの完成」といえるのではないかと考えられる。先代のピアーズ・ブロスナンのボンドから継続していたジュディ・デンチによる M が退場するとともに、これまでダニエル・クレイグのボンドでは登場していなかった、007 シリーズには欠かすことのできないマネーペニー（とQ）が、新たな肉体と精神性を伴って登場することは、ここに新しい M とマネーペニー（とQ）が揃うことで、ダニエル・クレイグのボンドが真にスタートすることも表していると考えられる（特に、Q とマネーペニーについては、役者の変更、若返りによって、（より物理的な）「新旧の融合」の象徴であるともいえると考えられる）。

また、これまで述べてきた三つの類型には当てはまらないものの、「新しいものと旧きものの対比」であるといえるのが、絵画『戦艦テメレル号』の登場（ボンドとQが初めて出会う）シーンである。この、ターナー作『戦艦テメレル号』は、イギリス国民にとって象徴的な絵画であると考えられる。絵画は、堂々とした威容を保つ戦艦テメレル号が、汽船に曳航されている様が、精緻な筆致で描かれている。この絵画における汽船とは、新時代を象徴する新技術であり、それに曳航される戦艦テメレル号はトラファルガーの海戦を戦った、「トラファルガーのヒロイン」と称される、旧時代の英雄・栄光の残滓であると考えられる。つまり、「旧きものへの退場宣告」であるといえる。同時に、ターナーは戦艦テメレル号を当時の状況そのままに正確に描いているわけではない。当時のテメレル号は、過去の戦勲にもかかわらず、浮き倉庫などに使われており、帆も失われているような状況であった。しかし、絵画の中では、往時の戦艦としての堂々たる威容を保っており、このとき、「旧きものへの鼓舞」が読み取れると考えられる。つまり、1.1 で示した「旧きものへ

の退場宣告」と1,2で示した「旧きものへの鼓舞」の両方の要素を併せ持っていると考えられる。

以上、三つの「新しいものと旧きものの対比」の類型から、『スカイフォール』は、特に、「旧きものへの鼓舞」を通じて、加えて、「新旧の融合」において、「旧きもの」の活路を示すことで、「旧きもの」たちに自信を取り戻させていると考えられる。また、このとき、「老大国」と評され、下り坂に居ることを突き付けられている英国自身をも鼓舞する映画であると考えられる。

2 『スカイフォール』と英国社会

1では、『スカイフォール』が「旧きもの」に自信を取り戻させ、ひいては、衰え行く英国への鼓舞を秘めていることを示した。ここでは、『スカイフォール』が英国社会とどのように結びついているといえるのか、より具体的に考察したい。

2.1 『スカイフォール』と英国のアイデンティティ問題

第一に、英国特有のアイデンティティを巡る問題との結びつきである。英国は、その正式の名称を、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland としており、連合王国である。それゆえに、それぞれの「イギリス人」は同時に「イングランド/スコットランド/ウェールズ/(北)アイルランド人」としてのアイデンティティも持ち合わせることになる。『スカイフォール』において、アイデンティティに関して明示的であるといえるのが、ボンドの復帰テストのなかの心理テストでのセリフである。セリフは、精神科医の発した言葉にボンドが連想する言葉を応答するゲームの中で現れる。

DOCTOR HALL Country./祖国

BOND England*/英国

ここでボンドは、祖国 (Country) から連想される言葉として、英国 (England) と答えている。このとき着目すべき点は二点ある。一つ目は、ボンドの出身地がスコットランドであるにもかかわらず、アイデンティティの表現が「イングランド」となっている点。二つ目は、「England」の訳語が「英国」となっていることである。一点目については、ボンドはMI6に所属するエージェント・007であり、いわば公務員の立場である。この時、職務として忠誠を誓い、服従するのは英国政府であり、その中心は当然イングランドにある。ゆえに、出身地のアイデンティティではなく、形式上のアイデンティティとして「England」と答えたのだと考えられる。このとき、イングランドやスコットランドを包摂する「Britain」や「United Kingdom」と答えなかったのには、次のような理由があると考えられる。

そもそも、イギリス国民は一般的に、イングランドやスコットランドといったネーショ

ンや、あるいはその下位の都市や地域コミュニティの方により強いアイデンティティを感じており、「ヨーロッパの一員」というアイデンティティはあまり強くは感じられない^{vi}。

ゆえに、ネーション単位でのアイデンティティ意識が強いため、包括的なものよりも、個別の「England」と答えたのではないかと考えられる。

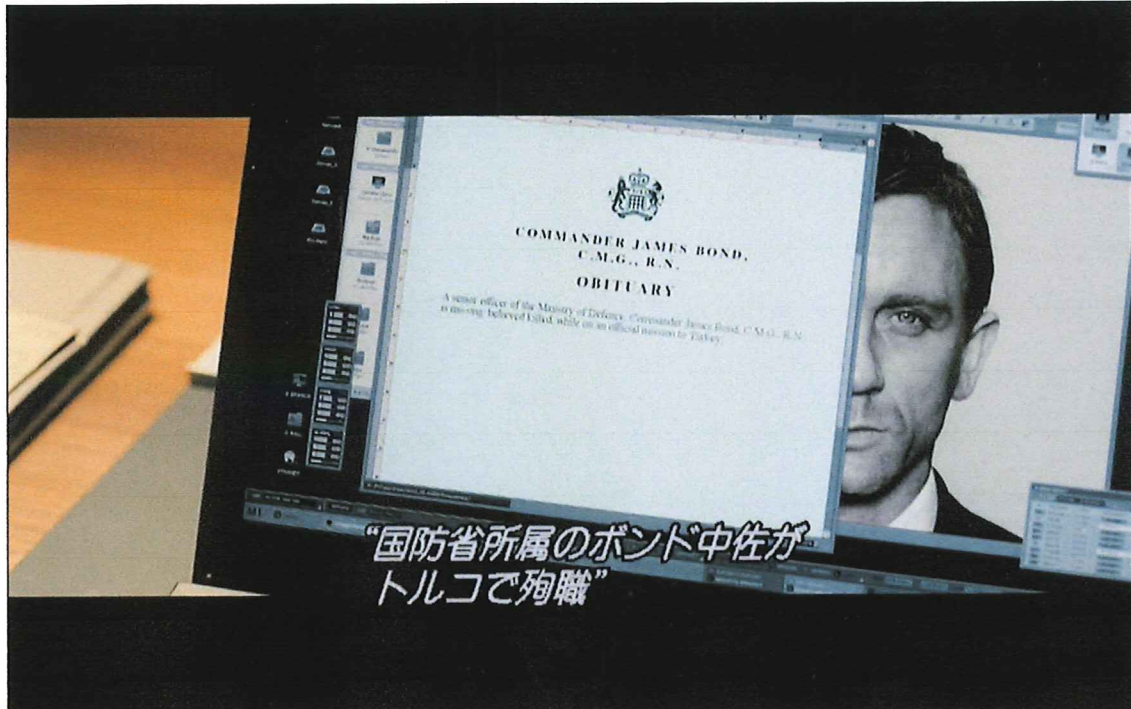
二点目について。英国の連合王国の性質からして、各王国は並列であるものの、歴史の流れからイングランド王がそれぞれの王座も兼ねるような体系となっている。このときイングランドは英国の中心であり、「英国≒イングランド」ともいえる。それゆえに、「England」が「英国」と訳されたのだと考えられる。同時に、イングランドと英国とを同一視する見方は、イングランド主義的とも言える。ブレグジット前夜ともいえる2012年時点の、このような「イングランド・ナショナリズム」の高まりについては、

とりわけ、近年における新しい動向は、従来の「ブリティッシュ・ナショナリズム」とは異なる、「イングランド・ナショナリズム」の動きがみられることである^{vii}。

との指摘もある。一方で、後述するように、2012年とはロンドンオリンピックの記念すべき年でもあり、ここでは「統合」された英国像をプレゼンテーションする機会でもある。よって、アイデンティティがネーション単位で形成されていることを認める、つまり、包括的なブリテンではなく、分裂した「イングランド/スコットランド/ウェールズ/(北)アイルランド」であることを認めつつも、その中で、イングランドが中心的な位置づけを担うことを印象付けることで、(特に、後述するロンドンオリンピックに向けて)「分裂しつつも、統合される」英国の姿が示されていると考えられる。

第二に、英国自身の影響力や立場との同期である。これは次の二つのポイントから、いまだ英国は「墮ちて」おらず、再び立ち上がることができることが表現されていると考えられる。一点目が、シルヴァとの島での対峙シーンである。ここでは、自分の方が勝っていると誇示し、ぼろぼろのボンドを憐れむシルヴァに対して、「熱い愛国心はある/Don't forget my pathetic love of country^{viii}」とボンドが答えている。これは、ヴィランに「墮ちた」シルヴァとの差異化（「僕は今も僕だ」のセリフにもあるように）のために、愛国心・国への忠誠が持ち出されているのであり、「愛国心を抱くボンドはいまだ落ちぶれていない」、つまり、「愛国心さえ持っていれば、まだ活路は見いだせる」という、老大国・英国へのメッセージでもあるといえると考えられる。二点目が、再生を巡る描写である。任務中の事故による戦線離脱したボンドは、上司のMによって追悼文（図IV参照）が書かれ、「死」が宣告される。しかし、その後ボンドは、ロンドンへと舞い戻り、任務へ復帰する。また、シルヴァとの対峙シーンにおいても、シルヴァに「君の趣味は？」と問われたボンドは「“復活”かな/Resurrection^{ix}。」と答えている。ここでは、「英国病」などと揶揄され、凋落が指摘される

イギリスが、かつての栄光あるスパイだが、もはや時代遅れであり退場を突き付けられているボンドと同期し、ボンドが「死」を宣告されながらも「復活」を宣言することで、英国自身もまた復活を遂げられることが高らかに謳われていると考えられる。



図IV Mによるボンドへの追悼文

2.2 英国統合の二つのアイコンー「女王陛下と 007」

英国にとっての 2012 年において、『スカイフォール』公開と同じく欠かせない出来事と言えば、やはりロンドンオリンピックであろう。世界に英国をプレゼンテーションする大舞台、その幕開けの開会式において、この大会は、偉大な二人のゲストを迎えることになる。史上最長の在位を誇ったエリザベス二世^{*}と、世界で最も有名なスパイ 007/ジェームズ・ボンドである。「女王陛下の 007」は、バッキンガム宮殿まで女王を迎えに参内し、ヘリコプターに同乗して会場へと向かう。そして、なんと最後には、女王（役）とボンド（役）は、『007 のテーマ』が流れる中、ユニオン・ジャック柄のパラシュートでヘリより飛び降り、（その後、女王と王配が、）会場に現れる。このとき、連合王国を束ねる女王と並列することで、007 は英国社会を統合し、象徴する存在となったのであると考えられる。

3 主題歌『Skyfall』が象徴する英国と 007 像

ここでは、映画主題歌およびタイトル・シークエンスを分析し、映画本編との関係性について考察したい。

3.1 歌詞分析ーアデルが歌い上げる「困難」前夜の英国

空が落ちる 粉々に砕け散って/ Let the sky fall when it crumbles

でも胸を張って/ We will stand tall

共に困難に立ち向かおう/Face it all together

スカイフォール それが私たちの出発点/Skyfall is where we start

遙か かなたの 手の届かない世界で/A thousand miles and poles apart

世界がぶつかり合う 暗黒の場所/ Where worlds collide and days are dark

名前と電話は教えるけど/You may have my number, you can take my name

このハートは渡さない/ But you'll never have my heart

空が落ちる 粉々に砕け散って/ Let the sky fall when it crumbles

でも胸を張って/ We will stand tall

共に困難に立ち向かおう/Face it all together^{xi}

上記は、『スカイフォール』（2012）主題歌の、Adele『Skyfall』の一節である。この主題歌についても、以下の三点から、映画本編と通ずるテーマを有していると考えられる。

一点目が、「空が落ちる/Let the sky fall」である。ここでは、「空＝絶対的な存在/信頼を寄せていた寄る辺＝英国」が崩壊する、という等式を読み取ることができると考えられる。つまり、本編における「旧きものへの退場宣告」が表現されていると考えられる。二点目が、「でも胸を張って/We will stand tall」である。この歌詞はまさに、「矜持を持って」という意味、つまり、2.1 で述べたボンドの「熱い愛国心はある/Don't forget my pathetic love of country」というセリフと共通する、英国への「旧きものへの鼓舞」にも通ずるメッセージではないかと考えられる。三点目が、「このハートは渡さない」である。前述したボンドの「愛国心」発言と同期して、外形的には凋落を認めざるを得ない英国でも、その中身には愛国心という熱い心（ハート）・誇りがあり、それは誰に傷付けることのできないものであることを表現していると考えられる。そして、これは、2012年の英国とそこに住まう英国人の気高いメンタリティを表現し、この後に英国が経験することになるいわゆる「ブレグジット」などの「困難」に立ち向かえるように、再び、「旧きものへの鼓舞」を表現していると考えられる。

3.2 タイトル・シークエンス分析―墮ちていく英国と 007

3.1 では、主題歌『Skyfall』の歌詞に絞って着目したが、ここでは、その主題歌が流れるタイトル・シークエンスの映像で、何が表現されており、それが本編とどのようにかわっているのか、考察したい。

一点目が、「落ちていく・墮ちていくボンド」である（図V参照）。アバンタイトルでボンドが撃たれた場面から接続して、まさしく物理的に落ちていく(falling)ボンドとともに、タイトル・シークエンスが始まる。ここで、ボンドが「落ちていく」こととは、「大英帝国」とそれに付随し、帝国の時代と共に輝いていた「スパイ」の落下・凋落（墮ちていく英国）を示していると考えられる。

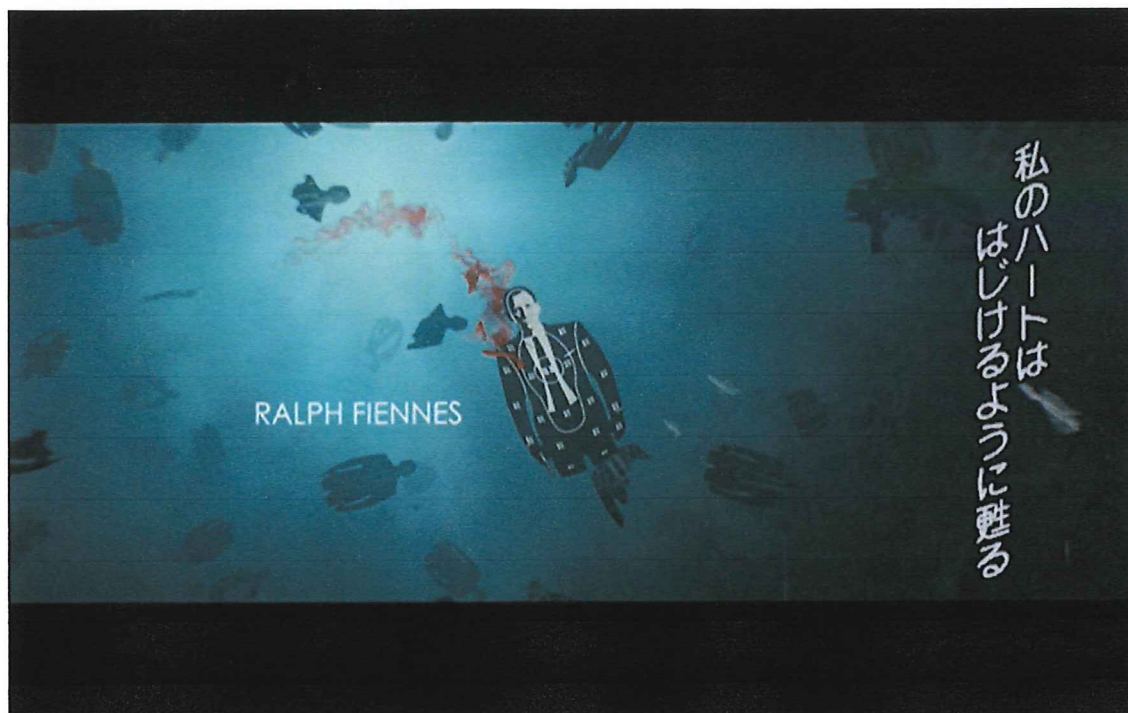


図V 落ちていくボンド

また、「落ちていくワルサーPPK」について。ワルサーPPKはボンドの愛用銃・片腕であるため、このショットは前述の「落ちていくボンド」の補強であると考えられる。同時に、武器としての側面に注目すると、シルヴァの「こんなに走り回って何になるんだ 飛びかかって格闘 ヘトヘトだ」（ボンドとの直接的な対決それ自体への悪態であると同時に、肉弾戦を伴うエージェントという存在自体への呪詛でもあると考えられる）セリフにもあるような、格闘を伴う旧時代的なスパイそのものをワルサーPPK は象徴しているといえ、それが落下する様は、スパイの凋落を表現していると考えられる。

二点目が、「銃創を負ったボンド」である（図VI参照）。確かに、アバンタイトルで右胸を撃たれ、血が滲んでいる描写がある。しかし、果たして図VIは単純なアバンタイトルの反映なのであろうか。アバンタイトルでのボンドの状況を反映させる積極的な理由がないように考えられる。また翻って、タイトル・シークエンスに「銃創を負ったボンド」を示すために、意図的にアバンタイトルでボンドが撃たれるように脚本したとも考えにくい。ゆえに、右胸が撃たれた事にも意味があり、それをタイトル・シークエンスで取り上げる意味もあるのだと考えられる。では、アバンタイトルでボンドが右胸を撃たれ、ひいては、それがタイ

トル・シークエンスで取り上げられる意味とは一体何であろうか。「ボンドが撃たれている」ことについては、(絶対的で英雄的な存在であったボンドの) 敗北・衰えの表現であると考えられる。そして、ボンドが的になっていることは、本作を貫く「新しいものと旧きものの対比」のうち、前述した「旧きもの」としてターンオーバー・退場を迫られる対象となっていることの表現であると考えられる。特に、ボンドがボンド自身の影を撃つショット(図VII参照)は、自己破壊と、その先にある再生と克己、つまり「旧きものへの鼓舞」であり、さらに言えば、「旧きもの」の復活といえるのではないかと考えられる。



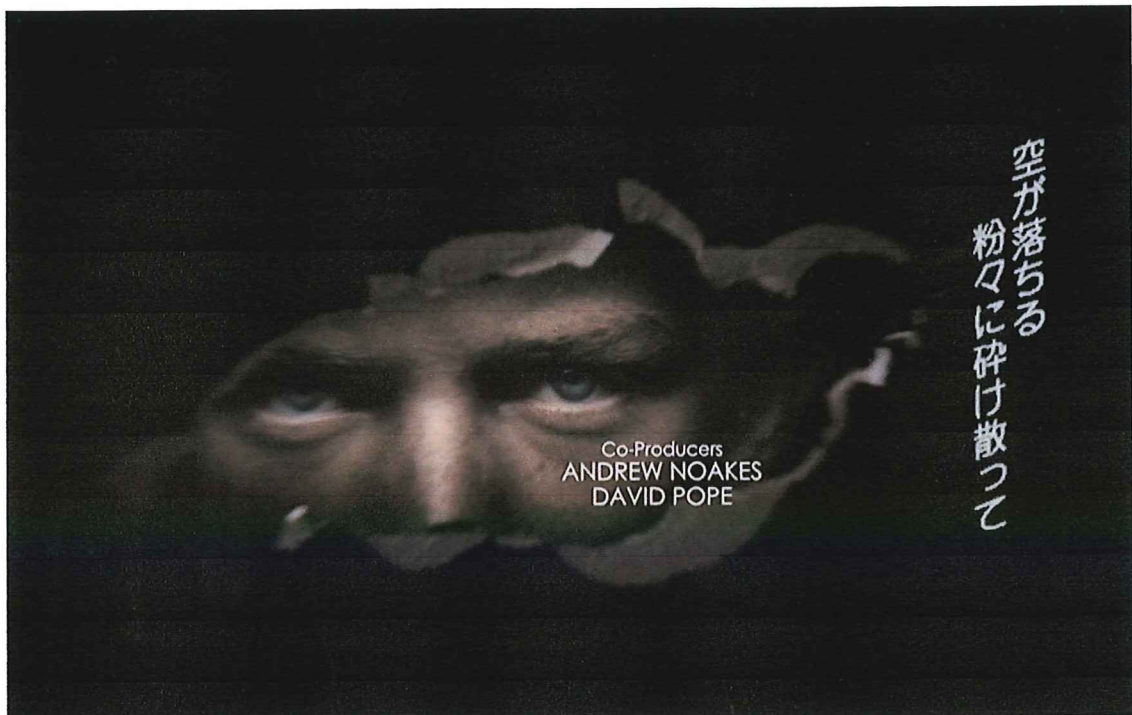
図VI 「銃創を負ったボンド」(タイトル・シークエンスにおいて)



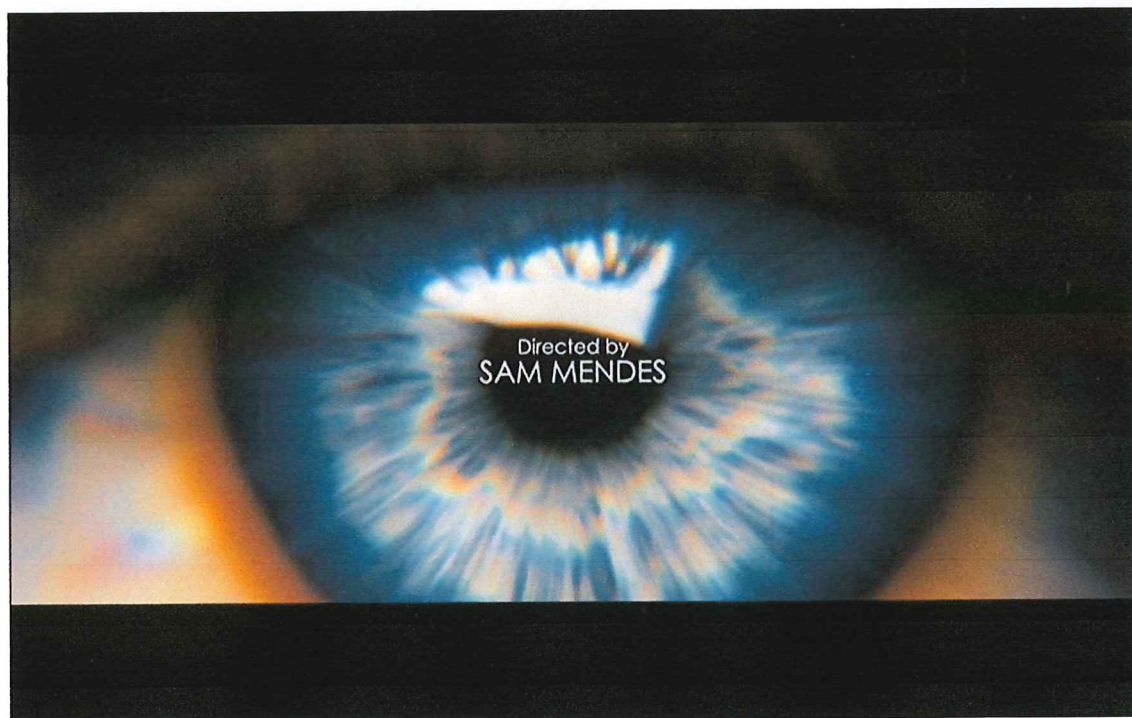
図VII 自身の影を撃つボンド

三点目が、繰り返される「ダニエル・クレイグの青い瞳」のショットについてである。007シリーズ最新作の『NO TIME TO DIE』では、セリフや描写によって「ダニエル・クレイグの青い瞳」がくどいまでに強調されていた。彼の特徴的な青い瞳は、ボンド就任が発表された際に波紋を呼んでいた。なぜならば、これまでの黒髪で黒や茶の瞳のイメージ（特に初代のショーン・コネリーのイメージが強く受容されていると考えられる）から離れ、初めて金髪碧眼であることから、ダニエル・クレイグは、007フランチャイズにおいて特異的であると評価されていた。そんな中、ダニエル・クレイグのボンド最終作である『NO TIME TO DIE』では、彼の花道として、彼によるボンドを振り返る意味合いを込めてか、彼に付きまとった「ダニエル・クレイグの青い瞳」をあえて強調して描いていたと考えられる。

翻って、『スカイフォール』での「ダニエル・クレイグの青い瞳」表現について考える。本作では、直接的に青い瞳について表現されているのは、タイトル・シークエンス中に二回現れる次のショットである（図VIII、IX参照）。このことが何を意味するのか、それは、『NO TIME TO DIE』同様に、フランチャイズ内でのダニエル・クレイグによるボンドの立ち位置（特異的であるとされたこと）を今一度示すとともに、翻って、フランチャイズの系譜にしっかりと則っていることを示すために、あえて、殊更に強調されたのではないかと考えられる。つまり、『NO TIME TO DIE』と併せて考えたとき、「ダニエル・クレイグの青い瞳」を強調する端緒が『スカイフォール』にあり、その発展・最終形が『NO TIME TO DIE』であるといえると考えられる。



図Ⅷ 一つ目の「ダニエル・クレイグの青い瞳」



図Ⅸ 二つ目の「ダニエル・クレイグの青い瞳」：タイトル・シークエンスの最後、この青い瞳をくぐり抜けて、本編へ移行する

4 結論—「大英帝国」へのノスタルジア

ここまで、本論では、『スカイフォール』において示された「新しいものと旧きものの対比」とその分類分けについて、また、「新しいものと旧きものの対比」を描いたことで『スカイフォール』と英国社会がどのように接続しているのかを示した。

ここでは、結論として、本論の考える『スカイフォール』のメッセージ「旧きものへの鼓舞」—ひいては自信を失った英国社会への鼓舞が、「旧きもの」について、「『大英帝国』へのノスタルジア」とも呼べる眼差しを持っていることについて考えたい。1であげた数々の対比において、「旧きもの」とされているものは、すべからく「『大英帝国』的なもの」であるといえる。ここでの鍵括弧付きの「『大英帝国』的なもの」とは、かつてのイギリス帝国のみを指すだけでなく、英国が栄華を極めた時代を想起させるもの全体を指すものである。そのような「旧きもの」が『スカイフォール』において鼓舞される、あるいはその存在価値を再発見されるということは、すなわち、「大英帝国」的なものへの憧憬とも言え、ここに、「『大英帝国』へのノスタルジア」が見て取れると考えられる。このような、「『大英帝国』へのノスタルジア」のなかで特に象徴的であると考えられるのが、Mのセリフの中で引用されていたテニソンの詩「ユリシーズ」である^{xii}。

かつて天と地を動かした あの強さを我々は失った だが英雄的な心は 今も変わらずに持っている 時代と運命に翻弄され弱くはなったが 意志は強く 戦い 求め見出し 屈服することはない

この詩の引用によって、『スカイフォール』における「旧きもの」への眼差しが、「かつて天と地を動かした」ような英雄的な過去に対する憧憬（『大英帝国』へのノスタルジア）であり、その栄光を失ったことへの悲観的な自覚はあるものの（引用内の「あの強さを我々は失った」、1で示した「旧きものへの退場宣告」）、しかし、いまだ息絶えてはおらず、再び立ち上がることができるという意思表示（「旧きものへの鼓舞」、主題歌中の「でも胸を張って/ We will stand tall」）であることが明らかにされていると考えられる。

ⁱ Olympics, “James Bond and The Queen London 2012 Performance”, *YouTube* (27 December 2012), < <https://www.youtube.com/watch?v=1AS-dCdYZbo&t=262s> >, (Accessed on 3 January 2023).

ⁱⁱ “Skyfall (2012) Film Script”, *script slug*, < <https://www.scriptslug.com/assets/scripts/skyfall-2012.pdf> >, (Accessed on 3 January 2023).

ⁱⁱⁱ *op. ct.*, p.72.

^{iv} *op. ct.*, p.133.

^v *op. ct.*, p.34.

^{vi} 細谷雄一『迷走するイギリス』（慶應義塾大学出版会、2016年）78頁。

^{vii} 同上、12頁。

viii *op. ct.*, p.70.

ix *op. ct.*, p.73.

x 君塚直隆『エリザベス女王』（中央公論新社、2020年）。vi頁。

xi 日本語歌詞は映画字幕より、英語歌詞は Adele 公式 YouTube より：Adele, “Adele-Skyfall(Lyric video)”, *YouTube* (19 October 2012), <<https://www.youtube.com/watch?v=DeumyOzKqgI>>, (Accessed on 13 January 2023).

xii 映画スクエア「詩、テニス、ユリシーズ」 <https://www.eiga-square.jp/title/007_skyfall/keyword/11>、アクセス日：2023.1.3。

参考文献

・ “Skyfall (2012) Film Script”, *script slug*,

<<https://www.scriptslug.com/assets/scripts/skyfall-2012.pdf>>, (Accessed on 3 January 2023).

・ 細谷雄一 (2016)『迷走するイギリス』慶應義塾大学出版会。

・ 君塚直隆 (2020)『エリザベス女王』中央公論新社。

・ 映画スクエア「詩、テニス、ユリシーズ」 <https://www.eiga-square.jp/title/007_skyfall/keyword/11>、アクセス日：2023.1.3。

その他参照史料

・ 『007 スカイフォール』。サム・メンデス。2012年。映画

・ Olympics, “James Bond and The Queen London 2012 Performance”, *YouTube* (27 December 2012), <<https://www.youtube.com/watch?v=1AS-dCdYZbo&t=262s>>, (Accessed on 3 January 2023).

・ Adele, “Adele-Skyfall(Lyric video)”, *YouTube* (19 October 2012),

<<https://www.youtube.com/watch?v=DeumyOzKqgI>>, (Accessed on 13 January 2023).